

東日本大震災から1周年を迎えて

2012年3月11日(日)

日本聖公会主教会

イエスは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と言われた。

(ヨハネによる福音書21章12節)

東日本大震災から1周年を迎えた今日、日本聖公会に連なる全ての人たちがそれぞれの教会に集い、心を合わせて、今なお困難な状況下におかれている被災者のため、被災地の一日も早い復興のため、そして大震災犠牲者のために、祈りをお献げくださいますようお願いいたします。

1年前の今日、東日本を襲った大地震は、多くの家屋を倒壊させ、大地震によって引き起こされた津波は、東日本の海岸線を襲い、家屋や工場を押し流し、多くの尊い命を奪い去りました。津波に襲われた福島第一原子力発電所は、制御能力をすべて失うという最悪の事態に陥り、原子炉内の核燃料融解、原子炉建屋の水素爆発による破壊によって大量の放射性物質が空气中に飛散し、土や海、建物を汚染し、住民は避難を余儀なくされました。1周年を迎える今も、多くの被災者が恐怖と不安におびえながら、仮設住宅や避難先での生活を送っておられます。

この大震災に対して、日本聖公会は、大震災発生から1か月後、被災者支援のための方策と救援物資集積場設置を協議し、仙台に本部を置く、「いっしょに歩こう！プロジェクト」を設立しました。「いっしょに歩こう！プロジェクト」は、東北教区被災者支援組織と協働しながら、南北500キロ以上の、広範囲にわたる被災地域の主だった地点に拠点を設け、被災者支援、地域社会復興のための活動を開始しました。教区・教会・日本聖公会関係団体は、このプロジェクトの働きを支援し、今日まで、様々な活動を実施してきました。この活動のために捧げられました皆様からの祈り、献金、救援物資、ボランティアの働きなどに対して心から感謝いたします。

今回の大震災では、日本聖公会各教区・関係諸団体だけではなく、海外の聖公会からも、多額の義捐金が寄せられました。その義捐金は、大震災被災者支援活動のため、

犠牲者のご遺族、家屋が全壊・半壊した日本聖公会関係者のお見舞いのため、被害を受けた教会・関係施設の復旧費用のためなどに有効に用いられております。

東日本大震災は私たちに多くの教訓を残しましたが、その中でも今私たちが避けて通れない問題があります。世界で唯一の被爆国である日本は、原爆の悲惨さと核兵器廃絶を世界に訴え続けてきました。その一方で、原子力の平和利用の名のもと、原子力発電所が日本各地に建設され、より多くの電力を消費することで、私たちは、快適で文化的な生活を享受してきました。しかし、東日本大震災は、原子力の平和利用を標榜した原子力発電の安全神話を粉々に打ち砕きました。今後は、原子力に依存するエネルギー政策の転換と、私たちのライフスタイルの転換が強く求められています。

二千年前、人生における師と仰いだイエスが十字架上で悲惨な死を遂げ、失意のど谷底に落とされた弟子たちはガリラヤに行き、以前漁師であったペテロが先頭に立って、夜、漁に出かけます。しかし、魚は1匹も捕れませんでした。無力感と絶望感に襲われ、朝、陸に戻ろうとした時、イエスが岸辺でたき火を起こし、焼いた魚とパンを用意して、弟子たちが岸辺に戻るのを待っておられたのです。弟子たちは、その人がイエスだとは気づきませんでしたが、イエスが示す場所に網を入れますと、おびただしい魚が網にかかりました。岸辺での、復活したイエスとの再会は、今までとは全く違った生き方を弟子たちにもたらしめました。復活のイエスは弟子たちに、どのような状態におかれても主は彼らを決して見放さず、生きるために必要なものを常に備えてくださることを示し、愛の絆で結ばれた人びとによる新しい世界を創造するよう、弟子たちに命じたのです。

東日本大震災から1年、大地震・大津波で打撃を受けた町々、村々では復興への槌音もまだまだかすかにしか聞こえてきません。そして放射能汚染地域の被災者には、いまだに解決への見通しは立っていません。被災した方々、また、身近な人を失った方々が穏やかな生活を取り戻すには、さらに多くの歳月と困難を伴うことになるでしょう。そのような苦しみの中にあっても、神様がお一人お一人に寄り添って心と体をお支えくださり、生きる勇気と希望が与えられますよう切に祈ります。

東日本大震災1周年にあたり、私たち教会に集う者が、被災地での神様のお働きを担っていく者として、引き続き、被災者支援と地域社会復興のために、より充実した活動を続けていくことを改めて心に刻みたいと願います。